

# 卒業論文「双対作用素と Schauder の定理」【詳細版】

中橋健太郎 \*

最終更新日：2021 年 1 月 13 日

## 概要

この PDF は卒業論文で, 紹介しきれなかった定義や命題の証明の付け加えたものである.

## 目次

1	基礎事項	1
1.1	Hahn-Banach の定理	1
1.1.1	順序関係, 極大元	1
1.1.2	Hahn-Banach の定理	2
1.2	線型作用素	4
1.3	双対空間	5
1.3.1	双対の記号	6
1.3.2	二重双対空間	6
1.3.3	双対空間の例	6
2	双対作用素	7
2.1	双対作用素の定義	7
2.2	Schauder の定理	7
2.2.1	コンパクト作用素	8
2.2.2	Ascoli-Arzelà の定理	8
2.2.3	双対作用素のコンパクト性	8

## 1 基礎事項

### 1.1 Hahn-Banach の定理

#### 1.1.1 順序関係, 極大元

Hahn-Banach の定理を述べるまえに, 集合論の復習をしておこう.

**定義 1.1 (順序関係).** 集合  $A$  の二項関係  $\preceq$  が次を満たすとき,  $A$  は順序関係  $\preceq$  をもつという:

- (反射律) 任意の  $a \in A$  に対して,  $a \preceq a$ .
- (推移律) 任意の  $a, b, c \in A$  に対して,  $a \preceq b$  かつ  $b \preceq c$  ならば  $a \preceq c$ .
- (反対称律) 任意の  $a, b \in A$  に対して,  $a \preceq b$  かつ  $b \preceq a$  ならば  $a = b$ .

また, 順序集合  $A = (A, \preceq)$  が比較可能性の法則を満たす, すなわち,

$$a, b \in A \quad \implies \quad a \preceq b \quad \text{または} \quad b \preceq a$$

が成り立つとき,  $A$  は全順序集合という.

- $s \in A$  が  $B \subseteq A$  の上界であるとは, 任意の  $x \in B$  に対して,  $x \preceq s$  となることである.
- $m \in A$  が  $A$  の極大元であるとは, 任意の  $x \in A$  に対して,  $m \preceq x$  ならば  $x = m$  となることである.
- $A$  が帰納的であるとは,  $A$  の任意の全順序部分集合が上界を持つことである.

**事実 1.2 (Zorn の補題).** 空でない任意の帰納的順序集合は極大元を持つ (証明には選択公理を使う).

\* 岡山理科大学理学部応用数学科 (2020 年度)

### 1.1.2 Hahn-Banach の定理

実線型空間における Hahn-Banach の定理が次である。

**定理 1.3 (Hahn-Banach の拡張定理 1).**  $E$  を  $\mathbf{R}$  上の線型空間,  $G \subseteq E$  を部分空間とする.

写像  $p : E \rightarrow \mathbf{R}$  と線型写像  $g : G \rightarrow \mathbf{R}$  が

$$p(\lambda x) = \lambda p(x) \quad (\forall x \in E, \forall \lambda \geq 0) \quad (1.1)$$

$$p(x+y) \leq p(x) + p(y) \quad (\forall x, y \in E) \quad (1.2)$$

$$g(x) \leq p(x) \quad (\forall x \in G) \quad (1.3)$$

を満たすとき,  $g$  を拡張する,  $E$  上の線型汎函数  $f : E \rightarrow \mathbf{R}$  (i.e.,  $\forall x \in G, f(x) = g(x)$ ) が存在して,

$$f(x) \leq p(x) \quad (\forall x \in E) \quad (1.4)$$

を満たす.

**定理 1.3 の証明.**

次のような集合  $P$  を考える.

$$P := \left\{ h \mid \begin{array}{l} h : D(h) \rightarrow \mathbf{R}, D(h) \text{ は } E \text{ の部分空間, } h \text{ は線型写像,} \\ G \subseteq D(h), h \text{ は } g \text{ の拡張であり, 任意の } x \in D(h) \text{ に対して } h(x) \leq p(x) \end{array} \right\}$$

$P$  の二項関係を

$$h_1 \preceq h_2 \quad \stackrel{\text{def}}{\iff} \quad D(h_1) \subseteq D(h_2) \text{ かつ } h_2 \text{ は } h_1 \text{ の拡張 ( i.e., } h_2|_{D(h_1)} = h_1)$$

と定めれば, これは順序関係である. 実際,  $D(h_1) = D(h_1)$  かつ  $h_1 = h_1$  により反射律がわかり,  $h_1 \preceq h_2$  かつ  $h_2 \preceq h_3$  を仮定すれば  $D(h_1) \subseteq D(h_2) \subseteq D(h_3)$  かつ任意の  $x \in D(h_1)$  に対して,  $h_1(x) = h_2(x) = h_3(x)$  より推移律もわかり,  $h_1 \preceq h_2$  かつ  $h_2 \preceq h_1$  を仮定すれば  $D(h_1) \subseteq D(h_2) \subseteq D(h_1)$  より  $D(h_1) = D(h_2)$  となり  $h_1 = h_2$  が従い, 反対称律も成り立つ. このことから  $g \in P$  がわかるので  $P \neq \emptyset$ . また,  $P$  は帰納的である. 実際,  $Q \subseteq P$  を全順序部分集合とし  $Q = \{h_i \mid i \in I\}$  とする. 写像  $u : D(u) \rightarrow \mathbf{R}$  を次のように定義する:

$$D(u) := \bigcup_{i=1}^n D(h_i); \quad u|_{D(h_i)} = h_i.$$

すると,  $u \in P$  かつ  $u$  は  $Q$  の上界である. 実際,  $D(u)$  が  $E$  の部分空間であることは  $Q$  が全順序部分集合であることから簡単にわかり<sup>1)</sup>,  $u$  の線型性も同様にわかり<sup>2)</sup>,  $u \in P$  がわかる. また  $u$  が  $Q$  の上界であることは, 任意の  $h_i \in Q$  ( $i \in I$ ) に対して,  $D(h_i) \subseteq D(u)$  かつ  $u|_{D(h_i)} = h_i$  となることからわかる. よって,  $P$  は帰納的であることがわかった. Zorn の補題 (事実 1.2) より  $P$  の極大元  $f \in P$  が存在する.  $D(f) = E$  が示されれば主張が従う.  $D(f) \neq E$  を仮定し,  $x_0 \in E \setminus D(f)$  を取る. 任意の  $\xi \in \mathbf{R}$  に対して,

$$v_\xi : D(f) \oplus \mathbf{R}x_0 := \{x + \alpha x_0 \mid x \in D(f), \alpha \in \mathbf{R}\} \ni x + \alpha x_0 \mapsto f(x) + \alpha \xi \in \mathbf{R}$$

として,  $D(v_\xi) = D(f) \oplus \mathbf{R}x_0$  上の線型汎函数  $v_\xi$  を定めると,  $v_\xi$  は  $f$  の拡張である. このとき,

$$v_{\xi_0}(x + \alpha x_0) \leq p(x_0 + \alpha x_0) \quad (\forall x \in D(f), \forall \alpha \in \mathbf{R}) \quad (1.5)$$

を満たす  $\xi_0 \in \mathbf{R}$  が存在することを示す. いま, 任意の  $x, y \in D(f)$  に対して,

$$\begin{aligned} (p(x+x_0) - f(x)) - (f(y) - p(y-x_0)) &= p(x+x_0) + p(y-x_0) - (f(x) + f(y)) \\ &= p(x+x_0) + p(y-x_0) - f(x+y) && \because f \text{ の線型性.} \\ &\geq p((x+x_0) + (y-x_0)) - f(x+y) && \because p \text{ の定義.} \\ &= p(x+y) - f(x+y) \geq 0 && \because f \in P. \end{aligned}$$

となる. ゆえに,

$$\beta_1 := \sup \{f(y) - p(y-x_0) \mid y \in D(f)\} \leq \inf \{p(x+x_0) - f(x) \mid x \in D(f)\} =: \beta_2$$

が成り立つから, 実数の稠密性から  $\beta_1 \leq \eta_0 \leq \beta_2$  なる  $\eta_0 \in \mathbf{R}$  が存在する. このような  $\eta_0 \in \mathbf{R}$  は (1.5) を満たす.  $\alpha = 0$  のときは人間ならわかるので, まず  $\alpha > 0$  のとき,

$$\begin{aligned} v_{\eta_0}(x + \alpha x_0) &= f(x) + \alpha \eta_0 \\ &\leq f(x) + \alpha (p(\alpha^{-1}x + x_0) - f(\alpha^{-1}x)) && \because \beta_2 \text{ は下限より.} \\ &= p(x + \alpha x_0) && \because p \text{ の定義, } f \text{ の線型性.} \end{aligned}$$

<sup>1)</sup>  $x, y \in D(u)$  とすると, ある  $j, k \in I$  があって  $x \in D(h_j), y \in D(h_k)$  となる.  $Q$  が全順序集合であることから  $h_j \preceq h_k$  または  $h_k \preceq h_j$  が成り立つので  $D(h_j) \subseteq D(h_k)$  または  $D(h_k) \subseteq D(h_j)$  が成り立つ.  $D(h_j) \subseteq D(h_k)$  としても一般性を失わないのでそうすると,  $x, y \in D(h_k)$  となり  $D(h_k)$  は  $E$  の部分空間なので  $\alpha, \beta \in \mathbf{R}$  に対して  $\alpha x + \beta y \in D(h_k) \subseteq \bigcup D(h_i)$  が得られる.

<sup>2)</sup> 記号は  $\uparrow$  と同じとする.  $h_j \preceq h_k$  とすると  $h_k|_{D(h_j)} = h_j$  なので  $\alpha u(x) + \beta u(y) = \alpha h_j(x) + \beta h_k(y) = \alpha h_k(x) + \beta h_k(y) = h_k(\alpha x + \beta y) = u(\alpha x + \beta y)$ .

となるからよい. 次に  $\alpha < 0$  のとき,

$$\begin{aligned} v_{\eta_0}(x + \alpha x_0) &= f(x) + \alpha \eta_0 \\ &\leq f(x) + \alpha(f(-\alpha^{-1}x) - p(-\alpha^{-1}x - x_0)) \quad \because \alpha < 0, \beta_1 \text{は上限より.} \\ &= (-\alpha)p(-\alpha^{-1}x - x_0) = p(x + \alpha x_0) \quad \because -\alpha > 0, p \text{の定義, } f \text{の線型性.} \end{aligned}$$

となる. よって, (1.5) を満たすような  $\xi_0 \in \mathbf{R}$  が存在する. すると, このとき,  $f \preceq v_{\xi_0}$  であるが  $f \neq v_{\xi_0}$  である. これは  $f$  を  $P$  の極大元としたことに矛盾. ゆえに,  $D(f) = E$  である.  $\square$

**定理 1.4 (Hahn-Banach の拡張定理 2).**  $E$  を  $\mathbf{K}$  上の線型空間,  $G \subseteq E$  を部分空間とする.

写像  $p: E \rightarrow [0, \infty)$  と  $G$  上の線型写像  $g: G \rightarrow \mathbf{K}$  は

$$p(\lambda x) = |\lambda| p(x) \quad (\forall x \in E, \forall \lambda \in \mathbf{K}) \quad (1.6)$$

$$p(x + y) \leq p(x) + p(y) \quad (\forall x, y \in E) \quad (1.7)$$

$$|g(x)| \leq p(x) \quad (\forall x \in G) \quad (1.8)$$

を満たすとする. このとき,  $g$  を拡張する,  $E$  上の線型汎関数  $f: E \rightarrow \mathbf{K}$  (i.e.,  $f|_G = g$ ) が存在して,

$$|f(x)| \leq p(x) \quad (\forall x \in E) \quad (1.9)$$

を満たす.

**定理 1.4 の証明.**

i.  $\mathbf{K} = \mathbf{R}$  の場合:

$p$  は (1.6) を満たすので当然 (1.1) も満たす. また, 任意の  $x \in G$  に対して,  $g(x) \leq |g(x)| \leq p(x)$  となることから, 定理 1.3 を適用すれば,  $E$  上の線型汎関数  $f: E \rightarrow \mathbf{R}$  が存在して

$$f(x) = g(x) \quad (\forall x \in G), \quad f(x) \leq p(x) \quad (\forall x \in E)$$

を満たす. また, (1.6) より任意の  $x \in E$  に対して,

$$-f(x) = f(-x) \leq p(-x) = |-1|p(x) = p(x)$$

が成り立つので,  $f$  は (1.9) を満たしている. //

ii.  $\mathbf{K} = \mathbf{C}$  の場合:  $E, G$  のスカラー値を実数に制限したものをそれぞれ,  $E_{\mathbf{R}}, G_{\mathbf{R}}$  と表す.

写像  $\operatorname{Re}: G \ni x \mapsto \operatorname{Re}(g(x)) \in \mathbf{R}$ ,  $\operatorname{Im}: G \ni x \mapsto \operatorname{Im}(g(x)) \in \mathbf{R}$  は  $G_{\mathbf{R}}$  上の実線型汎関数であるから, 前半の証明により  $E_{\mathbf{R}}$  上の実線型汎関数  $\tilde{F}_1: E_{\mathbf{R}} \rightarrow \mathbf{R}$ ,  $\tilde{F}_2: E_{\mathbf{R}} \rightarrow \mathbf{R}$  が存在して,

$$\tilde{F}_1|_{G_{\mathbf{R}}} = \operatorname{Re} g, \quad \tilde{F}_2|_{G_{\mathbf{R}}} = \operatorname{Im} g, \quad |\tilde{F}_i(x)| \leq p(x) \quad (\forall x \in E_{\mathbf{R}}, i = 1, 2)$$

を満たす. また,  $E$  上の新たな写像  $\tilde{f}: E \rightarrow \mathbf{R}$  を

$$\tilde{f}(a + ib) := \tilde{F}_1(a) - \tilde{F}_2(b) \quad (\forall a, \forall b \in E_{\mathbf{R}})$$

で定めると,  $\tilde{f}$  は明らかに実線型であり, 任意の  $x \in G$  に対して,  $\tilde{f}(x) = \operatorname{Re}(g(x))$  である.<sup>3)</sup> ここで  $f: E \rightarrow \mathbf{C}$  を

$$f(x) := \tilde{f}(x) - i\tilde{f}(ix) \quad (\forall x \in E)$$

により定めると,  $f$  は線型である. 実際, 任意の  $x \in E$  に対して,

$$\begin{aligned} f(ix) &= \tilde{f}(ix) - i\tilde{f}(i(ix)) && \because f \text{の定義.} \\ &= \tilde{f}(ix) - i\tilde{f}(-x) && \because i^2 = -1. \\ &= \tilde{f}(ix) + i\tilde{f}(x) && \because f \text{の実線型性} \\ &= -i^2 \tilde{f}(ix) + i\tilde{f}(x) && \because 1 = -(-1) = -i^2. \\ &= i(\tilde{f}(x) - i\tilde{f}(ix)) = if(x) \end{aligned}$$

であることから, 任意の  $x, y \in E$ ,  $\alpha = \alpha_1 + i\alpha_2 \in \mathbf{C}$ ,  $\beta = \beta_1 + i\beta_2 \in \mathbf{C}$  ( $\alpha_1, \alpha_2, \beta_1, \beta_2 \in \mathbf{R}$ ) に対して,

$$\begin{aligned} f(\alpha x + \beta y) &= \alpha_1 f(x) + \beta_1 f(y) + i\alpha_2 f(x) + i\beta_2 f(y) \\ &= (\alpha_1 + i\alpha_2)f(x) + (\beta_1 + i\beta_2)f(y) \\ &= \alpha f(x) + \beta f(y) \end{aligned}$$

<sup>3)</sup> 実際,  $x = a + ib$  ( $a, b \in G_{\mathbf{R}}$ ) とすると,  $\tilde{f}(x) = \tilde{f}(a + ib) = \operatorname{Re}(g(a)) - \operatorname{Im}(g(b)) = \operatorname{Re}(g(a)) + \operatorname{Re}(ig(b)) = \operatorname{Re}(g(a)) + \operatorname{Re}(g(ib)) = \operatorname{Re}(g(a + ib)) = \operatorname{Re}(g(x))$  となる.

となる。また、任意の  $x \in G$  に対して

$$f(x) = \operatorname{Re}(g(x)) - i \operatorname{Re}(g(ix)) = \operatorname{Re}(g(x)) + i \operatorname{Im}(g(x)) = g(x)$$

であり、任意の  $x \in E$  に対して、 $|f(x)| = \alpha f(x)$  かつ  $|\alpha| = 1$  なる  $\alpha \in \mathbf{C}$  を選べば<sup>4)</sup>,

$$|f(x)| = \alpha f(x) = f(\alpha x) = \operatorname{Re}(f(\alpha x)) = \tilde{f}(\alpha x) \leq p(\alpha x) = |\alpha| p(x) = p(x)$$

となる。これが求めるものであった。  $\square$

## 1.2 線型作用素

**定義 1.5 (線型作用素).**  $X, Y$  をノルム空間とする。

写像  $T: X \rightarrow Y$  が次を満たすとき、 $T$  を**線型作用素 (linear operator)** と呼ぶ：

$$\forall \alpha, \forall \beta \in \mathbf{K}, \quad \forall x, \forall y \in X, \quad T(\alpha x + \beta y) = \alpha T x + \beta T y.$$

**定義 1.6.**  $X, Y$  をノルム空間とする。

線型作用素  $T: X \rightarrow Y$  が**有界**であるとは、ある定数  $K \geq 0$  が存在して、任意の  $x \in X$  に対して、

$$\|Tx\|_Y \leq K \|x\|_X$$

が成り立つことである。また、線型作用素  $T$  が点  $x \in X$  で**連続**であるとは、 $x$  に収束する  $X$  内の任意の点列  $\{x_n\}_{n=1}^\infty$  に対して、

$\|Tx - Tx_n\|_Y \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) が成り立つことである。

**定理 1.7.**  $X, Y$  をノルム空間、 $T: X \rightarrow Y$  を線型作用素とする。このとき、以下は同値である。

(1)  $T$  は  $X$  上で連続である。 (2)  $T$  は原点で連続である。 (3)  $T$  は有界である。

**定理 1.7 の証明.**

(1)  $\Rightarrow$  (2) 自明。

(3)  $\Rightarrow$  (1) 任意に  $x \in X$  を固定する。 $x$  に収束する  $X$  内の任意の点列を  $\{x_n\}_{n=1}^\infty$  とする。まず、 $T$  の線型性から  $\|Tx_n - Tx\|_Y = \|T(x_n - x)\|_Y$  であり、いま、 $T$  が有界なので、ある定数  $K \geq 0$  があって  $\|T(x_n - x)\|_Y \leq K \|x_n - x\|_X$  となる。また、 $\|x_n - x\|_X \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) であるから、

$$\|Tx_n - Tx\|_Y \leq K \|x_n - x\|_X \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

となる。よって、 $T$  は  $X$  上で連続である。

(2)  $\Rightarrow$  (3) 背理法で示す。 $T$  が有界でないとする、任意の  $n \in \mathbf{N}$  に対して、ある単位ベクトル  $x_n \in X$  が存在し、

$$\|Tx_n\|_Y > n \|x_n\|_X = n$$

が成り立つ。 $y_n := \frac{1}{\sqrt{n}} x_n$  とおくと、

$$\|y_n - 0\|_X = \left\| \frac{1}{\sqrt{n}} x_n \right\|_X = \frac{1}{\sqrt{n}} \|x_n\|_X = \frac{1}{\sqrt{n}} \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$

となるから  $y_n \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) である。一方、

$$\|Ty_n - T0\|_Y = \|Ty_n\|_Y = \frac{1}{\sqrt{n}} \|Tx_n\|_Y > \frac{1}{\sqrt{n}} \cdot n = \sqrt{n} \rightarrow \infty \quad (n \rightarrow \infty)$$

となることから、 $Ty_n$  が  $T0$  に収束しないことがわかる。これは  $T$  が原点で連続であることに反する ( $y_n \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) にもかかわらず  $Ty_n$  は  $T0$  に収束しない)。よって従う。  $\square$

ノルム空間  $X$  からノルム空間  $Y$  への有界線型作用素全体を  $\mathcal{B}(X, Y)$  で表す。すなわち、

$$\mathcal{B}(X, Y) := \{T: X \rightarrow Y \mid \exists K \geq 0 \text{ s.t. } \forall x \in X, \|Tx\|_Y \leq K \|x\|_X\}$$

である。特に  $Y = X$  のときは  $\mathcal{B}(X)$  とかく。 $\mathcal{B}(X, Y)$  は次の和・スカラー倍により線型空間をなす：

$$\forall x \in X, \quad (T + S)x := Tx + Sx, \quad (\alpha T)x := \alpha Tx \quad (T, S \in \mathcal{B}(X, Y), \alpha \in \mathbf{K}).$$

<sup>4)</sup>  $f(x)$  が実数の場合、 $f(x) \geq 0$  なら  $\alpha = 1$ ,  $f(x) < 0$  なら  $\alpha = -1$  とすればよい。また、 $f(x)$  が実数でなかった場合、 $\alpha = |f(x)| / (\operatorname{Re}(f(x)) + i \operatorname{Im}(f(x)))$  とすればよい。

また,  $\mathcal{B}(X, Y)$  は次で定めるノルムによって, ノルム空間となる:

$$\|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} := \sup \left\{ \frac{\|Tx\|_Y}{\|x\|_X} \mid x \in X, x \neq 0 \right\} = \sup_{x \neq 0} \frac{\|Tx\|_Y}{\|x\|_X} \quad (T \in \mathcal{B}(X, Y)).$$

**定理 1.8.**  $X$  をノルム空間,  $Y$  を Banach 空間とする. このとき,  $\mathcal{B}(X, Y)$  は Banach 空間である.

**定理 1.8 の証明.**

$\{T_n\}_{n=1}^\infty$  を  $\mathcal{B}(X, Y)$  内の任意の Cauchy 列とすると, 任意の  $\varepsilon > 0$  に対して, ある  $N \in \mathbf{N}$  が存在して,  $N$  以上のすべての自然数  $n, m$  に対して,  $\|T_n - T_m\|_{\mathcal{B}(X, Y)} < \varepsilon$  が成り立つ. また, 任意の  $x \in X$  に対して,  $\|T_n x - T_m x\|_Y = \|(T_n - T_m)x\|_Y = \|T_n - T_m\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \|x\|_X < \varepsilon \|x\|_X$  より, 点列  $\{T_n x\}_{n=1}^\infty$  は  $Y$  内の Cauchy 列であることがわかる. いま,  $Y$  は完備であるから  $\{T_n x\}_{n=1}^\infty$  は収束する. その極限を  $Tx$  とかく.<sup>5)</sup> このとき,  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  であり  $\|T_n - T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) であることを示す. まず,  $T$  が線型作用素であることを示そう. 任意の  $x, y \in X$  に対して,

$$\begin{aligned} \|T(x+y) - (Tx+Ty)\|_Y &\leq \|T(x+y) - T_n(x+y)\|_Y + \|T_n x + T_n y - (Tx+Ty)\|_Y && \because T_n \text{ の線型性} \\ &\leq \|T(x+y) - T_n(x+y)\|_Y + \|T_n x - Tx\|_Y + \|T_n y - Ty\|_Y \\ &\longrightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty) && \because \|T_n z - Tz\|_Y \rightarrow 0 \end{aligned}$$

となるから,  $\|T(x+y) - (Tx+Ty)\|_Y = 0$  より  $T(x+y) = Tx+Ty$ . 同様に, 任意の  $\alpha \in \mathbf{K}$ ,  $x \in X$  に対して,

$$\begin{aligned} \|T(\alpha x) - \alpha Tx\|_Y &\leq \|T(\alpha x) - T_n(\alpha x)\|_Y + \|\alpha T_n x - \alpha Tx\|_Y \\ &= \|T(\alpha x) - T_n(\alpha x)\|_Y + |\alpha| \|T_n x - Tx\|_Y \\ &\longrightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

となることから,  $T(\alpha x) = \alpha Tx$  がわかる. よって,  $T$  は線型作用素である. 次に,  $T$  が有界であることを示そう.  $x \in X$  を任意の固定する. このとき,  $N$  以上のすべての自然数  $n, m$  に対して,

$$\begin{aligned} \|T_n x - Tx\|_Y &\leq \|T_n x - T_m x\|_Y + \|T_m x - Tx\|_Y \\ &= \|(T_n - T_m)x\|_Y + \|T_m x - Tx\|_Y \\ &\leq \|T_n - T_m\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \|x\|_X + \|T_m x - Tx\|_Y \\ &< \varepsilon \|x\|_X + \|T_m x - Tx\|_Y && \because T_n : \text{Cauchy 列} \end{aligned}$$

右辺を  $m \rightarrow \infty$  とすれば,

$$\|T_n x - Tx\|_Y \leq \varepsilon \|x\|_X \quad (1.10)$$

となる.  $\|Tx\|_Y - \|T_n x\|_Y \leq \|T_n x - Tx\|_Y$  に注意すれば,

$$\|Tx\|_Y \leq \|T_n x\|_Y + \varepsilon \|x\|_X \leq \|T_n\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \|x\|_X + \varepsilon \|x\|_X = (\|T_n\|_{\mathcal{B}(X, Y)} + \varepsilon) \|x\|_X$$

が成り立つ.  $T_n \in \mathcal{B}(X, Y)$  より  $\|T_n\|_{\mathcal{B}(X, Y)} < \infty$  であり,  $\varepsilon$  は任意であるから  $\varepsilon = 1$  とでもすれば  $T$  が有界であることがわかる. よって,  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  である. 最後に,  $T_n$  が  $T$  のノルム収束していることを示す. 式 (1.10) より,  $x \neq 0$  のとき, 両辺を  $\|x\|_X$  ( $\neq 0$ ) で割り,  $x \neq 0$  における sup をとれば,

$$\|T_n - T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \leq \varepsilon$$

であることがわかる. いま,  $\varepsilon$  は任意であったから, これは  $T_n$  が  $T$  にノルム収束していることにほかならない. ゆえに,  $\mathcal{B}(X, Y)$  は Banach 空間である.  $\square$

### 1.3 双対空間

線型作用素  $T: X \rightarrow Y$  において,  $Y = \mathbf{K}$  であるものを**線型汎関数**と呼ぶ. 有界線型汎関数全体のなす集合  $\mathcal{B}(X, \mathbf{K})$  を  $X'$  で表し,  $X$  の**双対空間**と呼ぶ.  $\mathbf{K}$  は完備であるから, ノルム空間  $X$  の双対空間  $X'$  もまた Banach 空間となる. ノルム空間に関する重要な結果として, 次の定理がある. これもまた, Hahn-Banach の定理と呼ばれる.

**定理 1.9 (Hahn-Banach の拡張定理 3).**  $E$  を  $\mathbf{K}$  上のノルム空間,  $G \subseteq E$  を部分空間とする. このとき, 任意の  $g \in G'$  に対して, 次を満たす  $f \in E'$  が存在する:

$$f|_G = g \quad \text{かつ} \quad \|f\|_{E'} = \|g\|_{G'}. \quad (1.11)$$

<sup>5)</sup> ここで注意すべきなのが「何か写像  $T: X \rightarrow Y$  があって  $Tx$  とかける収束先がある」という解釈ではなく「 $x$  に依存する収束先  $y$  があり, それを  $x$  に依存していることを強調して  $Tx$  と書きましょう」というものである. もちろん,  $x \in X$  に対応する  $y \in Y$  なので  $T$  は確かに  $X$  から  $Y$  への写像となっている.

**定理 1.9 の証明.**  $p: E \rightarrow [0, \infty)$  を  $p(x) := \|g\|_{G'} \|x\|_E$  で定めると, 定理 1.3 の条件を満たすので, ある線型汎関数  $f: E \rightarrow \mathbf{K}$  が存在し,

$$f(x) = g(x) \quad (\forall x \in G) \quad (1.12)$$

$$|f(x)| \leq p(x) \quad (\forall x \in E) \quad (1.13)$$

を満たす. (1.13) より  $\|f\|_{E'} \leq \|g\|_{G'}$  を得る. よって  $f \in E'$  である. また, (1.12) より, 任意の  $x \in G$  に対して  $|g(x)| = |f(x)| \leq \|f\|_{E'} \|x\|_E$  となるので,  $\|g\|_{G'} \leq \|f\|_{E'}$  を得る. ゆえに  $\|f\|_{E'} = \|g\|_{G'}$ .  $\square$

**系 1.10.**  $E$  を  $\mathbf{K}$  上のノルム空間とする.  $x_0 \in E \setminus \{0\}$  に対して, 次を満たすような  $f \in E'$  が存在する:

$$f(x_0) = \|x_0\|_E \quad \text{かつ} \quad \|f\|_{E'} = 1. \quad (1.14)$$

**系 1.10 の証明.**  $\mathbf{K}x_0 := \{\alpha x_0 \mid \alpha \in \mathbf{K}\}$  とおくと,  $\mathbf{K}x_0$  は  $E$  の部分空間である. ここで,  $G := \mathbf{K}x_0$  とおき  $G$  上の写像  $g: G \rightarrow \mathbf{K}$  を  $g(\alpha x_0) := \alpha \|x_0\|_E$  で定めると,  $g$  は明らかに線型であり, 任意の  $\alpha x_0 \in \mathbf{K}x_0$  に対して  $\|\alpha x_0\|_E = |\alpha| \|x_0\|_E = |\alpha| \|x_0\|_E = |g(\alpha x_0)|$  より  $\|g\|_{G'} = 1$  を得るから  $g \in G'$ . よって, 定理 1.4 により, ある  $f \in E'$  が存在して,  $f(x_0) = g(x_0) = \|x_0\|_E$  かつ  $\|f\|_{E'} = \|g\|_{G'} = 1$  となる.  $\square$

**系 1.11.**  $E$  をノルム空間とする. このとき, 任意の  $x \in E$  に対して, 次が成り立つ:

$$\|x\|_E = \sup_{\substack{f \in E' \\ f \neq 0}} \frac{|f(x)|}{\|f\|_{E'}} = \sup_{\substack{f \in E' \\ \|f\|_{E'}=1}} |f(x)| = \sup_{\substack{f \in E' \\ \|f\|_{E'} \leq 1}} |f(x)|. \quad (1.15)$$

**系 1.11 の証明.**

$x \in E$  とする.  $x = 0$  のときは明らかであるから  $x \neq 0$  とする. いま, 任意の  $f \in E'$  に対して,  $|f(x)| \leq \|f\|_{E'} \|x\|_E$  より

$$\sup_{\substack{f \in E' \\ f \neq 0}} \frac{|f(x)|}{\|f\|_{E'}} \leq \|x\|_E$$

を得る. また,  $x \neq 0$  なので, 系 1.10 により, ある  $f \in E'$  が存在して,  $f(x) = \|x\|_E$  かつ  $\|f\|_{E'} = 1$  が成り立つから,

$$\sup_{\substack{f \in E' \\ f \neq 0}} \frac{|f(x)|}{\|f\|_{E'}} \geq \frac{|f(x)|}{\|f\|_{E'}} = |f(x)| = \|x\|_E$$

を得る. ゆえに等号が成り立つ.  $\square$

### 1.3.1 双対の記号

以後, ノルム空間  $X$  の元  $x$  とその双対空間  $X'$  の元  $f$  における記号として  $f(x) = \langle f, x \rangle = {}_{X'}\langle f, x \rangle_X$  とかく. また, 双対空間  $X'$  の元を一般に  $x'$  などとかく. 系 1.10 より, 任意の  $x' \in X'$  に対して,  ${}_{X'}\langle x', x \rangle_X = 0$  ならば  $x = 0$  である.

**注意 1.12.** 上記の下線部の部分は, ノルム空間  $X$  の双対空間  $X'$  の元が豊富にあることを意味する.

### 1.3.2 二重双対空間

ノルム空間  $X$  の双対空間  $X'$  をノルム空間としての双対空間  $(X')' =: X''$  を  $X$  の**二重双対空間**と呼ぶ.  $X$  から  $X''$  への写像  $J_X$  を  ${}_{X''}\langle J_X x, x' \rangle_{X'} := {}_{X'}\langle x', x \rangle_X$  により定めると, 系 1.11 から

$$\|J_X x\|_{X''} = \|x\|_X$$

を得る. よって,  $J_X$  は等長線型である.  $J_X$  を**標準的単射**あるいは**標準対応**と呼ぶ. また,  $J_X$  が全射であるとき,  $X$  は**回帰的**あるいは**反射的**であるという.

### 1.3.3 双対空間の例

双対空間の例を紹介する前に, Banach 空間の比較的わかりやすいと思われる例を紹介しておく. 微積分学・線型代数学の知識より,  $\mathbf{R}^n$  や  $\mathbf{C}^n$  は Banach 空間である. それを自然に拡張した空間がある. 数列空間と呼ばれるものである. 任意に  $1 \leq p \leq \infty$  を固定し, 複素数列, あるいは実数列  $x = (\xi_1, \xi_2, \dots) = (\xi_n)_{n=1}^\infty$  で,

$$\|x\|_{\ell^p} := \begin{cases} \left( \sum_{n=1}^{\infty} |\xi_n|^p \right)^{1/p} & (1 \leq p < \infty), \\ \sup \{ |\xi_n| \mid n \in \mathbf{N} \} & (p = \infty) \end{cases}$$



が有限であるもの全体のなす集合を  $\ell^p(\mathbf{N})$  で表す. 演算を

$$(\xi_n)_{n=1}^\infty + (\eta_n)_{n=1}^\infty := (\xi_n + \eta_n)_{n=1}^\infty, \quad \alpha(\xi_n)_{n=1}^\infty := (\alpha\xi_n)_{n=1}^\infty \quad (\alpha \in \mathbf{K}, (\xi_n)_{n=1}^\infty, (\eta_n)_{n=1}^\infty \in \ell^p(\mathbf{N}))$$

により定める. ノルムは上述のとおりである.  $\ell^p(\mathbf{N})$  は Banach 空間となる. 証明は, そもそもノルム空間となること自体そんなに自明でないで, ここでは省略する.

**例 1.13 (数列空間の双対空間).**  $1 < p < \infty, q$  は  $p^{-1} + q^{-1} = 1$  により定まる実数とする. このとき,  $\ell^p(\mathbf{N})$  の双対空間は  $\ell^q(\mathbf{N})$  と等長同型である. すなわち,  $(\ell^p(\mathbf{N}))^{\text{id}} \cong \ell^q(\mathbf{N})$  である.

## 2 双対作用素

以後,  $X, Y$  を  $\mathbf{K}$  上のノルム空間とする.  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  に対して, その双対作用素  $T' \in \mathcal{B}(Y', X')$  を定義する.

### 2.1 双対作用素の定義

**補題 2.1.**  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  と  $y' \in Y'$  に対して, 写像  $f: X \rightarrow \mathbf{K}$  を

$$f(x) := {}_{Y'}\langle y', Tx \rangle_Y \quad (x \in X)$$

で定めると,  $f \in X'$  である.

**補題 2.1 の証明.** まず,  $f$  は線型である. 実際, 任意の  $x_1, x_2 \in X, \alpha, \beta \in \mathbf{K}$  に対して,  $y' \in Y'$  と  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  の線型性より  $f(\alpha x_1 + \beta x_2) = {}_{Y'}\langle y', T(\alpha x_1 + \beta x_2) \rangle_Y = \alpha {}_{Y'}\langle y', Tx_1 \rangle_Y + \beta {}_{Y'}\langle y', Tx_2 \rangle_Y = \alpha f(x_1) + \beta f(x_2)$  となる. また, 任意の  $x \in X$  に対して  $|f(x)| = |{}_{Y'}\langle y', Tx \rangle_Y| \leq \|y'\|_{Y'} \|Tx\|_Y \leq \|y'\|_{Y'} \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \|x\|_X$  より  $\|f\|_{X'} \leq \|y'\|_{Y'} \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  を得る.  $y' \in Y', T \in \mathcal{B}(X, Y)$  より  $\|y'\|_{Y'} < \infty$  かつ  $\|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} < \infty$  となるので  $\|f\|_{X'} < \infty$  である. よって  $f \in X'$ .  $\square$

**定義 2.2 (双対作用素).**  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  に対して, その双対作用素  $T': Y' \rightarrow X'$  を次で定める:

$${}_{X'}\langle T'y', x \rangle_{X'} := {}_{Y'}\langle y', Tx \rangle_Y \quad (y' \in Y', x \in X).$$

補題 2.1 より  $T'$  が well-defined であることがわかる.

**定理 2.3.**  $T \in \mathcal{B}(X, Y)$  に対して, 双対作用素  $T'$  は  $T' \in \mathcal{B}(Y', X')$  であって  $\|T'\|_{\mathcal{B}(Y', X')} = \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$ .

**定理 2.3 の証明.** 補題 2.1 より, 任意の  $y' \in Y'$  に対して  $\|T'y'\|_{X'} \leq \|y'\|_{Y'} \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  なので,  $\|T'\|_{\mathcal{B}(Y', X')} \leq \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  を得る. よって  $T' \in \mathcal{B}(Y', X')$ . 逆向きは,  $T'$  の双対作用素  $T'' := (T')': X'' \rightarrow Y''$  を考える. まず, 任意の  $y' \in Y'$  に対して,  ${}_{Y''}\langle J_Y(Tx), y' \rangle_{Y''} = {}_{Y'}\langle y', Tx \rangle_Y = {}_{X'}\langle T'y', x \rangle_{X'} = {}_{X''}\langle J_X x, T'y' \rangle_{X'} = {}_{Y''}\langle T''(J_X x), y' \rangle_{Y''}$  であるから,

$$J_Y \circ T = T'' \circ J_X \quad (2.1)$$

を得る. 標準対応  $J_X, J_Y$  の等長性より, 任意の  $x \in X$  に対して

$$\|Tx\|_Y = \|J_Y(Tx)\|_{Y''} = \|T''(J_X x)\|_{Y''} \leq \|T''\|_{\mathcal{B}(X'', Y'')} \|J_X x\|_{X''} = \|T''\|_{\mathcal{B}(X'', Y'')} \|x\|_X$$

が成り立つので,  $\|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \leq \|T''\|_{\mathcal{B}(X'', Y'')}$  を得る. また, 前半の証明により  $\|T''\|_{\mathcal{B}(X'', Y'')} \leq \|T'\|_{\mathcal{B}(Y', X')}$  となるので,  $\|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} \leq \|T'\|_{\mathcal{B}(Y', X')}$ . ゆえに,  $\|T'\|_{\mathcal{B}(Y', X')} = \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$ .  $\square$

## 2.2 Schauder の定理

以下, ノルム空間  $E$  に対して,  $B_E := \{x \in E \mid \|x\|_E \leq 1\}$  とする. また,  $K$  をコンパクト距離空間とし,  $K$  上の複素数値連続関数全体のなす集合を  $C(K)$  で表す.

### 2.2.1 コンパクト作用素

ノルム空間  $X, Y$  に対し, 線型作用素  $T: X \rightarrow Y$  がコンパクトであるとは,  $T(B_X)$  の閉包  $\overline{T(B_X)}$  が  $Y$  についてコンパクト集合であることをいう.  $X$  から  $Y$  へのコンパクト作用素全体のなす集合を  $\mathcal{K}(X, Y)$  で表すと, コンパクト集合は有界なので,  $\mathcal{K}(X, Y) \subset \mathcal{B}(X, Y)$  である. 線型作用素  $T: X \rightarrow Y$  がコンパクトであるための必要十分条件は,  $X$  の任意の有界点列  $\{x_n\}_{n \in \mathbf{N}}$  に対し,  $Y$  の点列  $\{Tx_n\}_{n \in \mathbf{N}}$  が収束部分列をもつことである. これは距離空間におけるコンパクト集合の特徴づけ (距離空間におけるコンパクト性は点列コンパクトと同値) と対角線論法によって示される (入来さんの卒論あるいはゼミノート参照).

### 2.2.2 Ascoli-Arzelà の定理

$C(K)$  の部分集合  $S$  が**同程度連続**であるとは、任意の  $y \in K, \varepsilon > 0$  に対して、 $y$  を含む開集合  $U$  が存在して、任意の  $f \in S$  に対して、 $x \in U$  のとき、 $|f(x) - f(y)| < \varepsilon$  が成り立つことである。また、 $S$  が**一様有界**であるとは、ある定数  $M > 0$  が存在し、任意の  $f \in S$  に対して、 $\sup \{|f(x)| \mid x \in K\} \leq M$  が成り立つことである。 $C(K)$  に関する重要な結果として次の定理が知られている。

**事実 2.4 (Ascoli-Arzelà の定理).**  $K$  をコンパクト距離空間とする。 $C(K)$  の部分集合  $S$  が一様有界かつ同程度連続ならば、 $S$  内の任意の関数列  $\{f_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  は  $K$  上で一様収束する部分列をもつ。

### 2.2.3 双対作用素のコンパクト性

$T \in \mathcal{B}(X, Y)$  の双対作用素  $T' \in \mathcal{B}(Y', X')$  のコンパクト性についての結果が次である。

**定理 2.5 (Schauder の定理).**  $X$  をノルム空間、 $Y$  を Banach 空間とする。このとき、以下が成り立つ：

$$T \in \mathcal{K}(X, Y) \iff T' \in \mathcal{K}(Y', X').$$

**定理 2.5 の証明.**

( $\implies$ )  $K := \overline{T(B_X)}$  とおくと、 $T \in \mathcal{K}(X, Y)$  より  $K$  はコンパクト集合である。また、集合  $\{y' \mid_K \mid y' \in B_{Y'}\}$  を  $B_{K'}$  と表すと、 $B_{K'}$  は  $C(K)$  の部分集合である。このとき、 $B_{K'}$  は一様有界である。実際、任意の  $z' \in B_{K'}$ 、 $z \in K$  に対して、 $|_{Y'} \langle z', z \rangle_Y| \leq \|z'\|_{Y'} \|z\|_Y \leq \|z\|_Y$  となる。いま、 $z \in K = \overline{T(B_X)}$  より、 $B_X$  の点列  $\{x_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  が存在し、任意の  $\varepsilon > 0$  に対して、自然数  $n$  を十分大きくとれば  $\|z\|_Y - \|Tx_n\|_Y \leq \|z - Tx_n\|_Y < \varepsilon$  が成り立つ。すなわち、 $\|z\|_Y < \varepsilon + \|Tx_n\|_Y \leq \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)} + \varepsilon$  が成り立つ。 $\varepsilon > 0$  は任意だったので  $\|z\|_Y \leq \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  となる。よって、 $\|z'\|_{Y'} \leq \|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  となり、 $\|T\|_{\mathcal{B}(X, Y)}$  は  $z'$  に依らないので、 $B_{K'}$  は一様有界であることがわかる。また、 $B_{K'}$  は同程度連続である。実際、任意の  $z_1 \in K$  と  $\varepsilon > 0$  に対して、 $K$  の開集合  $B(z_1; \varepsilon)$  を取ると、 $z_1 \in B(z_1; \varepsilon)$  であり、任意の  $z' \in B_{K'}$  に対して、 $z_2 \in B(z_1; \varepsilon)$  のとき、 $|_{Y'} \langle z', z_1 \rangle_Y - |_{Y'} \langle z', z_2 \rangle_Y| = |_{Y'} \langle z', z_1 - z_2 \rangle_Y| \leq \|z'\|_{Y'} \|z_1 - z_2\|_Y \leq \|z_1 - z_2\|_Y < \varepsilon$  となる。ここで、 $B_{Y'}$  の任意の点列を  $\{y'_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  とすると、 $B_{K'}$  は一様有界かつ同程度連続であるから、Ascoli-Arzelà の定理 (事実 2.4) より、 $K$  上で一様収束する部分列  $\{y'_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  が存在する。よって、

$$\begin{aligned} \|T'y'_{n_j} - T'y'_{n_k}\|_{X'} &= \sup_{x \in B_X} \left| |_{X'} \langle T'(y'_{n_j} - y'_{n_k}), x \rangle_X \right| && \odot T' \text{ の線型性.} \\ &= \sup_{x \in B_X} \left| |_{Y'} \langle y'_{n_j} - y'_{n_k}, Tx \rangle_Y \right| && \odot T' \text{ の定義.} \\ &\leq \sup_{y \in K} \left| |_{Y'} \langle y'_{n_j} - y'_{n_k}, y \rangle_Y \right| && \odot T(B_X) \subseteq \overline{T(B_X)} = K. \\ &\longrightarrow 0 \quad (j, k \rightarrow \infty) && \odot \{y'_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}} \text{ は } C(K) \text{ 上の Cauchy 列.} \end{aligned}$$

を得る。したがって、 $\{T'y'_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  は  $X'$  の Cauchy 列である。また、 $X'$  の完備性より、 $\{T'y'_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  は収束列となる。ゆえに、 $T$  の双対作用素  $T'$  はコンパクト作用素である。 //

( $\impliedby$ )  $X$  の任意の有界点列を  $\{x_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  とすると、標準対応  $J_X$  の等長性より、 $\{J_X x_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  は有界点列となる。いま、 $T'$  の双対作用素  $T'' : X'' \rightarrow Y''$  を考えると、前半の証明により、 $T''$  はコンパクト作用素となるので、 $\{T'' J_X x_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  は収束部分列  $\{T'' J_X x_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  をもつ。また、定理 2.3 の証明中の式 (2.1) により、 $\{J_Y T x_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  は収束列であるから、Cauchy 列となる。さらに、標準対応  $J_Y$  の等長性から、 $\{T x_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  も Cauchy 列となる。仮定より  $Y$  は完備であったから  $\{T x_{n_j}\}_{j \in \mathbb{N}}$  は収束する。ゆえに、 $T$  はコンパクト作用素である。  $\square$

## 参考文献

- [1] Haïm Brezis 著・藤田宏監訳・小西芳雄訳、「関数解析 その理論と応用に向けて」、産業図書。
- [2] 荷見守助・長宗雄・瀬戸道生共著、「関数解析入門 線型作用素のスペクトル」、内田老鶴圃。
- [3] 宮島静雄著、「関数解析」、横浜図書。
- [4] 内田伏一著、「集合と位相」、裳華房。